

# 幼小の接続を滑らかにする 幼児理解を生かした児童理解の在り方

— 交流場面における「聞く・話す」に視点をおいた見取りを通して —

八木 双美子<sup>1</sup>

子どもの発達や学びの連続性を保障するために、幼小の円滑な接続が求められている。本研究では、小学校教員の幼児理解が重要だと考え、幼小の教員による意見交換会を行った。年長児と1年生の交流授業において幼児を見取り、具体的な姿に基づいて意見交換を行うことにより、幼児理解が深まった。そして、幼小の接続を滑らかにするための児童理解につながるものとして幼児理解が有効であることが明らかになった。

## はじめに

文部科学省が平成17年に示した「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）」において、「近年の幼児の育ちについては、基本的な生活習慣や態度が身に付いていない、他者とのかかわりが苦手である、自制心や耐性、規範意識が十分に育っていない、運動能力が低下しているなどの課題が指摘されている」と示されている。一方で、小学校1年生の教室において、児童が学習に集中できない、教員の話が聞けずに授業が成立しないなど学級がうまく機能しないという一面があるとも示されている。

児童の小学校生活への適応のためにも、幼小が滑らかに接続する必要がある、そのためには、子ども一人ひとりの発達や学びをつなぐことが重要である。

本研究では、教員の果たす役割が重要であると考え、小学校教員による幼児理解を深めるための手立てについて検証した。

## 研究の内容

### 1 幼小接続の現状

平成21年度から全面実施された幼稚園教育要領と平成23年度から全面実施された小学校学習指導要領、平成21年度から適用された保育所保育指針において、改めて幼小接続に関して幼小が相互に留意する旨が規定され、各学校・施設での幼小接続が意識されるようになった。

一方、文部科学省が平成21年12月に市町村・政令指定都市・中核都市の教育委員会に対して実施した調査では、「幼稚園と小学校における教育が接続すること

は重要であるか」という問いに対し、99%が重要であると回答しながらも、「教育課程上の接続のために取組を行っているか」という問いに対して、80%が十分実施されているとは言えないと回答した。

その理由として、「接続関係を具体的にすることが難しい」（52%）、「幼小の教育の違いについて十分理解しているとはいえない」（34%）、「接続した教育課程の編成に積極的になれない」（23%）の三点が挙げられている。

### 2 研究テーマの設定

本研究では、幼小接続のための取組が進まない三つの要因のうち、「教育の違いについて十分理解しているとは言えない」に注目した。それは、教育の違いについて理解することで、子どもの発達や学びをつなぐ具体的な取組を見出すことができると考えたからだ。

教育の違いを理解する方法は様々考えられるが、本研究においては、子どもを見取り、理解する際の幼小教員の視点に注目した。子どもを見取る際の視点には、それぞれの教育が目指すねらいや方法が関わるため、教員が行っている見取りの違いから教育の違いを見出せると考えた。

幼小の教員が同じ場で幼児の見取りを行い、見取った幼児の姿について意見交換することで、自分の見取りと意見交換する相手の見取りとの違いや共通点を実感しながら、互いの教育の違いを理解できると考えた。

また、幼小の教員が、幼児期の教育の視点での子どもの育ち（以下、「子どもの育ち」という。）を共有することで幼児理解を深められるだろうと考えた。

そして、深めた幼児理解を入学期の児童理解に生かすことが幼小の接続を滑らかにすると考え、研究テーマを「幼小の接続を滑らかにするための幼児理解を生かした児童理解の在り方」とした。

意見交換会が充実するために、見取りの視点を定め、サブテーマを「交流場面における『聞く・話す』に視点をおいた見取りを通して」とした。

1 茅ヶ崎市立浜須賀小学校

研究分野（今日的な教育課題研究 入学期における児童の小学校への適応に関する研究）

ここで、本研究における「幼小」、「教員」、「幼児」の定義を述べておく。

「幼小」…幼稚園だけではなく、保育所、認定子ども園を含む幼児期の教育を担う施設で行われる幼児期の教育と児童期の教育という意味で用いる。

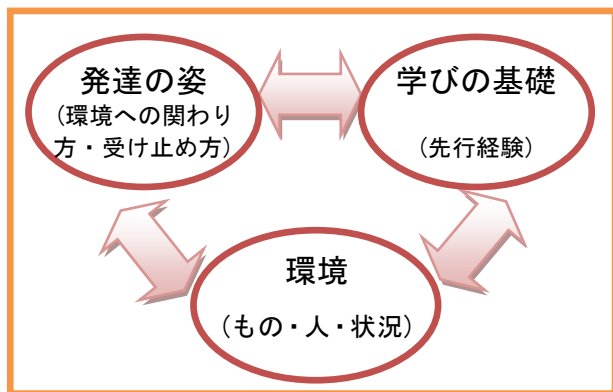
「教員」…幼小の教育を担う施設における教員や保育士、両者の意味で用いる。

「幼児」…入学期の児童につながる年齢の子どもとして年長児という意味で用いる。

### 3 「子どもの育ち」

本研究において小学校教員が深める幼児理解とは、幼児期の教員と同じ視点で幼児理解を深めるということである。

そこで、幼時期の教員の視点を共有するために「子どもの育ち」を三つの観点で整理した(第1図)。この「子どもの育ち」は、入学期の児童理解へつなげるために小学校教員が捉えたいことである。



第1図 「子どもの育ち」

幼稚園教育要領解説に示される通り、幼児期の教育は環境を通して行う教育であり、「子どもの育ち」を支えるものは、環境だと考えた。ここでいう環境とは、幼稚園教育要領解説によると、子どもの周りにある全てのもの・子どもが関わる全ての人・子どもが過ごすために関わる様々な状況である。意見交換の際、環境の観点を持つことで、教育方法や指導方法について幼児期の教育の視点での意味やねらいを明確化できると考えた。

そして、この環境を土台として、多くの幼児が示す発達の様と学びの基礎を位置付けた。

発達には個人差があるが、大筋で見ると同じような道筋をたどると幼稚園教育要領解説で述べられている。発達の様とは、幼稚園教育要領解説によると、その時期の幼児の環境への関わり方、環境の受け止め方に他ならず、集団や一人の幼児の姿を意見交換によって共有する中で見出せるその時期の特徴である。発達をの観点で捉えることで、入学期の児童のより正確な見

取りにつながると考えた。

学びの基礎は、児童にとって、小学校以降の生活や学習に生かされる先行経験であり、小学校教員が捉えることで幼児期の教育の学びの芽を小学校の学びへと生かしていけると考えた。

三つの観点はそれぞれ相互に関わり、影響し合うものである。

### 4 研究の仮説

研究テーマに迫るために、次のように研究仮説を立てた。

具体的な幼児の姿を基に、幼小の教員が行う意見交換会において、小学校教員の幼児理解が深まり、幼小の滑らかな接続へつながるだろう。

そして、仮説を検証するために、幼児理解を深める場となるよう、意図的に幼小教員の意見交換会を計画し、実施した。意見交換会の目的は、見取った幼児の姿を基に幼小の教員が意見交換を行うことで、「子どもの育ち」を共有し、小学校教員が幼児理解を深めることである。また、小学校教員が幼小の教育の違いを理解することである。そこで、意見交換会が充実するよう二つの手立てを設けた。

### 5 意見交換会の充実に向けた手立て

#### (1) 見取りシート

幼小の教員による意見交換会において、幼児の「聞く・話す」姿に視点を置いて幼児を見取るためのシート(以下、「見取りシート」という。)を作成した。これによって、同じ視点で見取ることとなり、幼児の姿を共有できると考えた。

見取りの視点を「聞く・話す」としたのは、「聞く・話す」が、活動の中で表出する力ということに加えて、うつむいて聞いている、笑顔で話しているなど、表情や態度からもその時の幼児の内面を見取ることができると考えたからである。

また、「聞く」力を、小学校教員は入学した児童に足りない力として、幼稚園の教員は小学校入学前に身に付けさせたい力として挙げており、双方に関心の高い力であることから、「聞く」を視点として取り上げた。

作成にあたっては、幼児期の教育の見取りの視点を取り入れるために、幼稚園教育要領解説や保育所保育指針解説書に記されている幼児の「聞く・話す」に関わる文言から項目を精選し、活動前・中・後に分類した。活動前後にも意識して「聞く」姿を見取ることで、双方に関心の高い「聞く」力について、幼小の意識の違いを話し合えと考えると考えたからである。

そして、「聞く・話す」姿について具体的に見取るために、どんな活動・だれと・どのようにという視点を入れた。

さらに、見取りの元となった表情やしぐさ、言葉などを記載できるようにメモ欄を設けた。多くの幼児が示す姿を「全体的」、一部の幼児の姿を「一部」として分けて記入できるように項目を設けた。

第2図が作成した「見取りシート」の一部である。

幼児理解に向けた「聞く・話す」姿の見取りシート					
実施日：平成( )年( )月( )日( )曜日		記入者			
見取りに使った時間：( )分					
シートの目的 ○交流活動中における幼児の「聞く・話す」姿を見取ります。					
及び活用方法 ○記述した幼児の具体的な姿を基に、意見交換会を行います。 ○本シートを使用した意見交換会を通して、幼児理解を深め、児童理解につなげます。					
記述方法 ○当てはまる姿が見られた項目に☑をつけ、可能ならば名前を記入します。 ○特定の幼児に関する場合は、「一部」の欄に☑をつけ、可能ならば名前を記入します。 ○補足の記述が必要な場合は、各項目の余白、メモ欄に記述します。					
参考情報 ○交流活動時の年長児の名札は「緑色」、児童の名札は「茶色」です。					
	項目	聞いている		話している	
		全体的	一部 (名前)	全体的	一部 (名前)
交流活動前	①先生の顔を見て	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
	②姿勢正しく	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
	③落ち着かない様子で	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
	④周りを見て合わせて	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
	⑤みんなから離れて	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
どんな活動	①歌わりながら	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
	②物を作りながら	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
	③物を使って遊びながら	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
	④一緒に遊びながら	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
	⑤1対1の相手と	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )

第2図 「見取りシート」(一部・未記入)

「見取りシート」は幼児と児童が行う交流活動において、小学校教員が幼児の「聞く・話す」姿を項目に沿って記入した。そして、意見交換会において、幼小の教員が記入した「見取りシート」(第3図)を参考にして話し合った。

	項目	聞いている		話している	
		全体的	一部 (名前)	全体的	一部 (名前)
交流活動前	①先生の顔を見て	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
	②姿勢正しく	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
	③落ち着かない様子で	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
	④周りを見て合わせて	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
	⑤みんなから離れて	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
交流活動中	①歌わりながら	☑	☑ ( b )	☑	☑ ( )
	②物を作りながら	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
	③物を使って遊びながら	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
	④一緒に遊びながら	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
	⑤1対1の相手と	☑	☑ ( )	☑	☑ ( d )
交流活動後	②グループの人の話を	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
	③園の先生の話	☑	☑ ( )	☑	☑ ( e )
	④年長児の話	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
	⑤1年生の話	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
	①縦線を合わせて	☑	☑ ( )	☑	☑ ( f, g )
	②体を使って表現しながら	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
メモ	③物を使って表現しながら	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
	④質問しながら	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
	⑤自分の考えを持って	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
	⑥理由を	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
	①先生の顔を見て	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
	②姿勢正しく	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )
③落ち着かない様子で	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )	
④周りを見て合わせて	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )	
⑤みんなから離れて	☑	☑ ( )	☑	☑ ( )	

第3図 「見取りシート」(記入済例)

## (2) 幼児と児童との「交流活動」

幼児の見取りを行う場面として、幼児と児童との交流活動(以下「交流活動」という。)を設定した。

「交流活動」が見取りの場となるためには、実施教科にかかわらず、幼児の「聞く・話す」を引き出せる活動、「聞く・話す」が活発になるように幼児が主体的に関われるような活動、楽しく関わりながら気持ちを高め合える活動が必要だと考えた。そこで、本研究においては、生活の単元で、活動内容は幼児にとって身近であり、幼児と児童と一緒に遊んだり、聞いたり話したりできるようなものがふさわしいと考え、児童と一緒におもちゃを作り、遊ぶ活動を設定した。

また、「交流活動」は、小学校教員が小学校で行う学習で実施した。「環境」が大きく変化するときは、入学期もそうであるように、誰でも緊張や不安を抱く。そうした状況下における幼児の「聞く・話す」姿を、幼小の教員と一緒に見取り、意見交換を行うことで継続期の児童理解へとつながると考えたからである。

さらに、児童の「交流活動」への意欲を高めるために、単元の初めに児童が幼児を訪問し、幼児と交流を持つ活動を位置付け、小学校へ招待したいという児童の主体的な活動を引き出し、幼児と児童にとって次の交流への期待が膨らむようにした。

「交流活動」は、所属校第1学年5クラス(145名)と、幼児と児童が歩いて行き来できる近隣の私立幼稚園のA園・認可保育園のB園・公立保育園のC園の合計5クラス(144名)を対象にして行った。実施に当たっては、幼小の担当者が事前に打合せを行い、幼小交流へ向けた計画(第1表)を立案した。

第1表 幼小交流授業へ向けた計画

月	内容
7～8月	○幼小交流の日程調整 ○目標・ねらいの調整・確認 ○活動のおおよその流れの調整・確認
9月	○幼小交流活動(交流訪問) 場所：A・B・C園 指導者：年長児の教員
10月	○幼小交流活動(「交流活動」) 場所：所属校 指導者：第1学年の教員 ○意見交換会

### 単元の概要

- ①教科名：生活
- ②単元名：えんのともしとこんにちは(12時間扱い)
- ③単元の流れ

小単元	時間	小単元名
1	2	私たちの学区には何があるだろう
2	2	学区探検で発見しました 一園へ行こう(交流訪問)―
3	8	〇〇園の年長児を招待しよう 一小学校へ招待しよう(交流活動)―

④本時の目標（小単元3の6時間目）

おもちゃを作って遊ぶ活動を通して、年長児の気持ちを考えて、聞いたり話したりしながら、楽しく交流できる。

⑤本時の指導上の配慮事項

「交流活動」では、幼児が聞いたり話したりすることが活発になるよう活動の工夫をした。

まず、おもちゃの作り方を教えて、作ったおもちゃで遊ぶ活動を設定した。それは、教えるときも遊ぶときも、聞いたり話したりする活動が活発になると考えたからである。

また、幼児・児童が聞いたり話したりする機会が多くなるよう少人数のグループ活動を設定した。

6 意見交換の実際

「交流活動」に関わった幼小の教員が参加して、同日の放課後に意見交換会を実施した。

小学校教員が「見取りシート」に記入した幼児の姿について幼小の教員が意見交換を行い、具体的な幼児の姿について、「子どもの育ち」を共有した。その際、それぞれの見取りを可視化して共有を図り、小学校教員が幼児理解を深められるようにした。

ここでは、意見交換の中から二つの事例を取り上げ、意見交換の内容を分析し、幼児理解の深まり、幼小の教育の違い、意見交換会の充実に向けた手立ての有効性について述べる。

(1)事例1 幼児の「聞く」姿勢

「交流活動」の始めに、小学校教員が幼児・児童全員へ指示をする場面で、小学校教員が「話します」と声をかけると、幼児・児童それぞれが、話している教員の方を向き、聞く姿勢になった。

この場面について、小学校教員は第4図のように「見取りシート」へ記入している。「全体指導の場」、「落ち着かない様子で」、「①先生の顔を見て」と「②姿勢正しく」という項目の「聞いている」、「全体的」にチェックを入れた。そして、「お話しますに反応」と幼児の様子を書き加えている。

	項目	聞いている	
		全体的	一部 (名前)
全体指導の場	①先生の顔を見て	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/> ( )
	②姿勢正しく	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/> ( )
	③落ち着かない様子で	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/> (きょろきょろ)
	④周りを見て合わせて	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/> ( )

第4図 事例1の「見取りシート」記入（一部）

また、「③落ち着かない様子で」という項目には、「一部」にチェックを入れ、「きょろきょろ」と、注目した幼児の姿についての記述がある。意見交換会では、

この記述を基にして話し合いが行われた。

[意見交換会の内容]

小T1 幼T1	「話します」で幼児も反応していました。園でも同じようにしています。年長組は「〇〇組さん」と呼びかけたら、自分の名前でもなく、自分のことだと分かるように練習しています。
小T2	1年生と同じです。幼児の中には、 <u>1、2分経つと落ち着かない様子の子もいました。</u>
幼T2	<u>広がっていると集中するのは難しいです。</u> 園では、子どもの視線が届くように教員の前に集めて話します。
小T3	<u>きょろきょろし始めた子は自分に話しているのではないと思ったようでした。</u>
幼T3	<u>言葉が難しかったかもしれませんね。</u> 分かる言葉・理解できる言葉・短い言葉を使うようにしています。また、目を合わせて確認しながら話しています。

聞く姿勢が取れたことを共有した後、1、2分経過後の幼児の姿について意見交換をした。

「幼児の中には、1、2分経つと落ち着かない様子の子もいました」という小学校教員の見取りは、「1、2分しか聞く姿勢が続かず、落ち着かなくなる」という見取りである。それに対して、幼児期の教員は、「広がっていると集中するのは難しいです」と話している。「広がっていると」の言葉に、広がっていなければ聞く姿勢が続くということがうかがえることから、幼児期の教員は、幼児が長い時間でも聞く力があると捉えていることが分かる。

ここに見取りの違いがある。小学校教員が多くの幼児が示した姿を見取ったのに対して、幼児期の教員は環境に照らした発達の姿を見取っている。

さらに、幼児のきょろきょろした姿を、小学校教員は落ち着かない様子だと見取り、その理由を幼児自身に向けて話していないと感じていたと思ったが、幼児期の教員は、言葉が難しかったと見取り、幼児が集中して話が聞ける園での環境を伝えている。幼児期の教員は、環境を踏まえた学びの基礎に照らして見取りをしており、ここにも、幼小の見取りの違いが見られた。

ここで、事例1から幼小教員が共有した幼児の姿を「子どもの育ち」の三つの観点で見ると、環境での意識の違いがあることが分かる。幼児期の教員は小学校教員が考える以上に、教員の前に集めて、視線が届く位置に小さく集合させて、何度も繰り返す、確認する、分かる言葉・理解できる言葉・短い言葉を使うといった環境を意識している。こうした環境を基盤として、小学校教員の話し始める合図の言葉の意味が分かり、聞く姿勢をとるといった学びの基礎が育っていたと言える。この幼児の発達の姿は、聞く姿勢は続かないで

はなく、広がっていると集中できない・難しい言葉では理解できないであることを、小学校教員は意見交換会によって知ることができた。

このことから、小学校教員は「交流活動」で実際の幼児の姿を見取っただけでは明確でなかった「子どもの育ち」を知ることとなり、幼児理解が深まったと言える。

## (2) 事例2 活動の切り替え

おもちゃ作りに集中して、同じグループの1年生から遊びに行こうと促されても、仕上げの色塗りに夢中になって、なかなか動かなかった幼児がいた。この場面について、小学校教員は第5図のように「見取りシート」へ記入している。「どんな活動」、「②物を作りながら」の項目の「聞いている」、「一部」にチェックを入れ、「聞いているが反応しない」と注目した幼児の姿について記述している。また、メモの欄には、その時の内容と状況を意見交換会で思い出せるように記述している。

	項目	聞いている	
		全体的	一部 (名前)
どんな活動	①教わりながら	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/> (b 物を見て)
	②物を作りながら	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/> (h 聞いているが反応しない)
	③物を使って遊びながら	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	④一緒に遊びながら	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
メモ	h ← 1年 遊びに行こう		

第5図 事例2の「見取りシート」の記入（一部）

この見取りから、活動の切り替えの時期と教員の関わりについて、次のような意見交換がなされた。

[意見交換会の内容]

小T 4	幼児が活動に集中している状態は続けさせたいが、一方グループの1年生は遊ぶ時間があつた方が楽しいだろうと考えて、幼児を誘っていました。限られた授業時間の中で、夢中になっている時の活動の切り替えをどうすべきかが難しいと感じます。
幼T 4	活動が時間内に終わらなくても、他の時間にしようかと言える時間的・空間的余裕が園にはあります。しかし、小学校入学後、無理に合わせなければいけなくなったときに、このことでどんな影響がでるか知りたいです。
幼T 5	年長児はカレンダーや時計を使って(1時間以内の長針)見通しを持たせるようにしています。それは、子どもの中で納得できることが大切だと考えているからです。

小学校教員は、仕上げの色塗りに夢中になって1年生の声かけにも反応しないと見取り、小学校の日課の中でこのような幼児の姿に活動の切り替えの難しさを感じていると伝えている。それを受け、幼児期の教員は、園では取り組む十分な時間的・空間的余裕があるとしながら、このように夢中になって活動する多くの幼児が示す発達の姿が、小学校にどのようにつながっているのか関心を示している。

ここでは、「見取りシート」の記入がきっかけとなり、活動の切り替えの時期と教員の関わりについて幼小教員の協議を行った。

幼児期の教員は、幼児が集中して取り組む行動を支える園での環境について伝える一方で、カレンダーや時計、予定をメモしたホワイトボードなどを使って見通しを持たせ、活動を切り替える経験をさせるための環境を意図的に作っていることも伝えている。

幼小教員が共有した「子どもの育ち」を三つの観点で見ると、幼児期の教員が学びの基礎を育むため意図的に作っている環境の意味やねらいに幼小の意識の違いがあることが分かる。幼児期の教育では、環境を通じて見通しを持たせ、活動を切り替える経験を重ねることで、学びの基礎を身に付けさせていることが分かる。そして、活動に集中して取り組む、活動の切り替えができるといった発達の姿を理解した。幼児期の教員によるこの環境による援助が全体に対して行われていることから、注目した幼児だけの姿ではなく、多くの幼児が示す発達の姿だと分かる。

小学校教員は意見交換会における協議を通して、「子どもの育ち」を共有することができ、幼児理解が深まった。

## 7 成果

本研究では、小学校教員が幼児理解を深めるための手立てとして、幼小の意見交換会を実施し検証を行った。意見交換会では、「見取りシート」を活用し、「交流活動」の設定を工夫したことで充実した話合いができ、小学校教員の幼児理解を深めることができた。

「見取りシート」の活用による成果として、次の三点が考えられる。

まず、一点目として、幼児を見取る視点を明確にして、小学校の教員に幼児期の教育の視点を提示したことで、具体的な幼児の姿が見取れるようになったことである。そして、視点を合わせて意見交換したことで、話合いの内容を焦点化することができた。

次に、二点目として、小学校教員が幼児全体の示す姿と個々の幼児の姿を見取ったことである。それは、活動全体を通じて、全体的に捉えられる姿と個々の姿が見取れるよう、また、事前・事後の姿も確認できるよう、「全体的・一部」、「交流活動前」、「交流活動後」の記入欄を設けたため、小学校教員がそれらを意識し

て見取ったのである。

そして、三点目として、「見取りシート」にメモ欄を設けたことにより、幼児の表情や内面の見取りができたことである。内面を見取ったことが意見交換会での話合いの深まりにつながった。

「交流活動」は小学校で行う学習活動を設定した。

そのことによって、不安や戸惑いを覚えながら交流を楽しもうとする幼児の姿について、幼小教員は幼児の入学後の姿と関連させながら意見交換することができた。事後に取材した、幼児期の教員の感想「戸惑う幼児の姿を見ることができ、どのように乗り越えるだろうかと見守りました」や小学校教員の「園でも小学校と同じような経験があることを知ったので、次の1年生には生かしていきたい」という感想から、入学期4月の児童の姿と重ねながら幼児を見取っていたことが分かった。

さらに、幼小教員による意見交換会では、「子どもの育ち」を共有することで、小学校教員は実感から教育の違いを理解・意識することができたことも成果である。

これまでの小学校教員は幼児をイメージで捉えていたのではないだろうか。しかし、本研究での意見交換会に向けた取組として、「見取りシート」を活用し、実際に具体的な幼児の姿を見取ることによって、幼児の姿は確かに見られた幼児の姿となった。そして、意見交換会では、見取りの違いからそれぞれの教育の違いに気づき、「子どもの育ち」を共有することで、幼児期の教員と同じ視点で小学校教員が幼児理解を深めることができたと言える。

## 8 今後の展望

研究にあたって、幼小接続のための取組が進まない要因のうち、「幼小の教育の違いについて十分理解しているとはいえない」ことに着目した。

本研究における意見交換会での取組において、幼小の教員が互いの教育の違いを理解し、小学校教員が幼児理解を深められることが検証できた。

また、検証の際に幼小の教員が共有した「子どもの育ち」が、入学期の児童理解の在り方につながることも見えてきた。

今後は、本研究の試みを基に、小学校教員がこうした児童理解の在り方を実践・見直しをしていくことで、幼小接続への教職員の意識を高め、学校独自の入学期のための教育課程の編成を考えていく必要がある。

### おわりに

本研究では、児童の小学校生活への適応のために、幼小が滑らかに接続する必要があると考え、子ども一人ひとりの発達や学びをつなぐ手立てとして、幼小教

員の意見交換が有効であることを明らかにした。

意見交換会により、幼小の教員が教育の違いを理解することで、双方の教員は教育の違いを意識しながら、それぞれの教育が担う役割を果たしていけると実感していた。そして、小学校教員は入学期の児童の戸惑いに寄り添えるようになった。こうした小学校教員の幼児理解の深まりが、小学校生活への適応を目指した具体的な関わり方につながると考えられる。幼児理解をすれば、教員の関わり方は変わる。だからこそ、見取りが違うことを、具体的に意識できる機会を持つことが大切だろう。

入学して、顔見知りになった教員が、幼児期の教員がしていたように関わりながら、児童が徐々に小学校教育に慣れるように援助していくことで、児童は安心して小学校生活を送ることができるようになっていくだろう。

最後に、調査や交流実践にご協力いただいた関係者の方々に深く感謝申し上げます。

### 引用文献

文部科学省 2005 「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について(答申)」([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013102/002.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013102/002.htm)(2014. 2. 25 取得))

### 参考文献

お茶の水女子大学附属幼稚園小学校中学校子ども発達教育研究センター 2008 『「接続期」をつくる』  
神奈川県立総合教育センター 2006 「幼・小 小・中学校種間連携学習指導事例集」  
厚生労働省 2008 『保育所保育指針解説書』 フレーベル館  
国立教育政策研究所教育課程センター 2005 『幼児期から児童期への教育』 ひかりのくに  
文部科学省 2008 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館  
文部科学省 2010 「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」  
木下光二 2010 『育ちと学びをつなげる幼小連携—小学校教頭が幼稚園へとび込んだ2年間』 チャイルド本社  
木村吉彦監修・仙台市教育委員会編 2010 『スタートカリキュラムのすべて—仙台市発信・幼小連携の新しい視点—』 ぎょうせい  
永井聖二・神尾美津子 2011 『幼児教育の世界』 学文社